

2個となる。即ち低精度、又は高精度が要求される場合は乙法は甲法に比し必ずしも有利とは考えられない。

クス育種の基礎研究 (オニ報)

クスの塩素酸加里に対する抗毒性に就て

專 樟 試 倉 田 隆
山 田 保 昭

クスの林業品種を識別するため形態に關係の少ない生理的特性を利用出来れば識別も容易となり、更に今後の育種上貢獻する所大である。茲に $KClO_3$ を用いて各品種の抗毒性の差異を検定した。材料は主に2-3年生であり枝の先端約20 cm の間を実験に供した。実験結果の概括表は次の通りである。

各 品 種 の 害 徴 率

KClO ₃ 濃 度	アカクス		アオクス		芳 樟		腦 樟		備 考
	一日目	二日目	一日目	二日目	一日目	二日目	一日目	二日目	
5 %	96	45.6	15.6	92.0	20.0	91.0	28.8	95.0	5本宛
3 %	46	55.2	11.5	66.6	22.0	71.6	36.4	73.0	5本宛
1 %	11.2	50.7	20.2	60.2					25本宛

KClO ₃ 濃度	アカクス		ホケクス		備 考
	一日目	二日目	一日目	二日目	
3 %	5.0	5.0	1.4	6.4	伏試木 2本宛
1 %	5.0	3.1	6.8	45.0	2本宛

KClO ₃ %	初 位	アカクス			芳 樟			備 考	
		一日目	二日目	三日目	一日目	二日目	三日目	伏 試 木	
1 %	春芽	15.4	45.0	72.7	27.1	58.2	84.8	アカクス	29本
								芳 樟	21本
1 %	夏芽	3.5	21.7	41.5	7.0	33.4	60.3	アカクス	43本
								芳 樟	38本

以上の如くであるが、使用した各品種は従来の識別基準に従っている。芳樟、腦樟は台湾産にして、前者はリナロールを含有するを特徴とし、後者は成分に於ては日本産に異なる。日本産アカクスと台湾産芳樟との耐寒性の優劣に於ては厳密な試験ではないが

林地に於ける寒害状況は次の如く稍アカタスの方が強いと考えられる。

寒 害 状 況

	無	極 少	微	中	激	枯 死	合 計
アカタス	50						50
芳 樟	0	26	10	7	3	1	50

従つて次の結論が得られた。 1) アカタス、アオタス、芳樟、脂樟の種に抗毒性が弱い。 2) ホケタスはアカタスよりも抗毒性が弱い傾向がある。 3) 生長程度によつて差異があり、春芽は夏芽より抗毒性が弱い。 4) 耐寒性との関係に於ては明確ならざるも、芳樟はアカタスより耐寒性に弱い傾向ある故、他の植物の場合と異なり正の相関が得られた。この問題については今後の研究にまつ。

くす種子の貯蔵について

日本専売公社しょう脳試験場 国生哲夫

緒言 くす苗木は一年生で山出し得る健全苗を育てなくてはならない。而してくす種子の発芽は2～3ヶ月を費すのであつて就中生長期の5、6月を発芽に費す事は非常に育苗に影響する。又長期に亘る発芽は生長を不揃いにし得苗率を減少するので発芽率を減少せしめざるべく一斉に発芽せしめるのが先決問題である。そこで種子調理由播種迄の取扱問題を検討した今回は土中埋蔵を行つたのである。

試験の方法

1. 種子埋蔵場所 鹿児島市下伊敷町 しょう脳試験場内苗圃

2. 埋蔵の時間的区分

くす種子は調理由乾燥せしむれば三日目迄は意欲に乾燥し、七日目迄はやゝ意に乾燥し、それ以降は極めて僅かづつ乾燥するので本試験の時間的区分は、即日埋蔵、三日目埋蔵、七日目埋蔵の三つに区分した。

3. 埋蔵位置の区分(深さの関係)

地表下5寸、1.2尺、2.5尺の位置に埋蔵を行つた。この三者の含水率は次を通りである。

埋 蔵 位 置	地 下 5 寸	地 下 1.2 尺	地 下 2.5 尺
含 水 率	31 %	34 %	36.5 %

4. 砂との混合度区分

種子を1とした場合、川砂を0, 1, 2, 3, 4, 5, の割合で混合した。

以上の四種について夫々区別し昭和27年1月10日に即日埋蔵を実施し、3日目